

# 言語と系統関係 I

櫻井 健

## 導 入

言語を分類する場合、系統関係によって関連づけるかあるいは類型論的な指標を用いるかのどちらかの手法が用いられる。たとえば系統樹 *Stammbaum* は系統関係を示す典型的なツールである。本来相対的な時間的分布を示す系統関係は地理的分布を考える場合にも重視される。これは地理的分布が時間軸に沿って展開することが疑問の余地のない現象だと思われるからであろう。一方類型論的な分類をする場合、地理的に隣接することあるいは歴史的に関係することは無意味な情報である。ようするに2つの分類法は別個の基準を持っている。とはいうものの、どちらも共通して現実の形質を基準としている。形質は固定されたものとして把握され、動態的特性は考慮されない。

ある言語がなぜ他の言語と異なる形質を持つかを考えるとき、言語の変化するという特性を考慮しないわけにはいかない。もちろん言語変化は言語内にのみその動機を持つものではない。さらに言語が他の言語からの干渉を受けない環境に置かれることは希であり、たいていの言語は程度の差はあれ他の言語との接触から自由ではない。言語接触の環境では具体的な言語使用に調整局面が生じる。言語使用の変化の動機に言語内的言語外的という区別は存在しない。このような環境から創出される新しい言語は場合により既存の言語の系統関係から逸脱することがある。このような言語は伝統的な系統樹に配置できないのか、言い換えれば動態的パターンを分類の基準とする方法はないのであろうか。

## 1. 言語変化のパターン

収束 *convergence* とは、隣接する言語が系統とは無関係に接触によって共通の特性を発達させ、結果として外部からはその特性が当該言語群の地域的特性として観察される現象をいう。収束により地域的共通特性が他の

地域的共通性を分断することがあり、この現象を分岐 *divergence* と呼ぶことにする。伝統的な比較言語学は分岐に属する現象を対象とするもので、言語接触下における収束の研究は、問題提起はすでに19世紀の青年文法学派が主流であったころからされているものの、比較言語学のようなメソッドや裏付けとなる標準的理論が確立しているとはいえない。

新しい言語は使用の特性によっていくつかに分類される。一般的に接触によって生じた新しい言語が母語話者を持たない場合その言語はピジン(語)、接触によって生じた新しい言語が母語話者を持つ場合はクレオール(語)と呼ばれる<sup>1)</sup>。これらの区分は多分に社会学的なものであり、かならずしも言語学的とはいえない (Todd 1990: 4)。いずれにしても言語学的に重要な点は、創出される言語と基層および語彙供給言語との関連性に集約される。なかでもクレオール発達のモデルはマクロ的な意味での言語史に位置づけられる。たとえば Gilbert (1986) は図1のようなモデルを提示する (p. 21)。

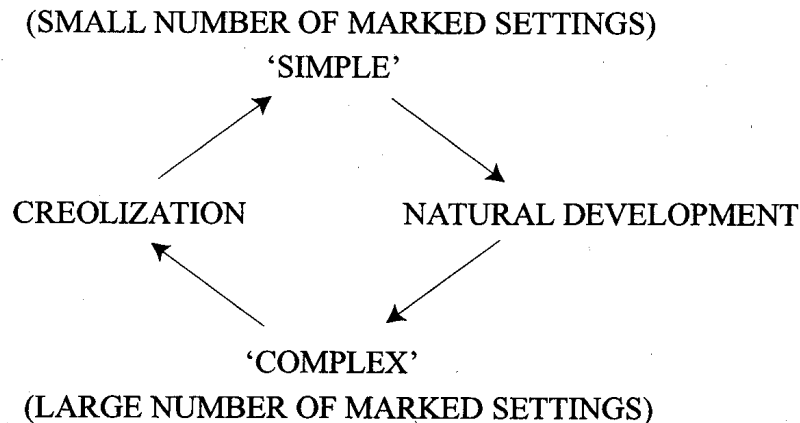


図1

クレオールの前段階としてのピジンにはいくつかの発展段階が想定される。たとえば Arends et al. (1994) では *jargon*, *stabilized pidgin*, *expanded pidgin* の3段階が区別され、図2のようなモデルが挙げられている (Mühlhäusler 1986 (cited by Arends et al. 1994: 6))。

言語接触によって生成される母語話者を持つ新しい言語のなかに、このようなジャーゴンやピジン化のプロセスを経ないものも観察されている。これらうちのあるものは後述するように混成言語 *mixed language* としてクレオールとは区別される。混成言語は接触の環境下に創出されるが、基

## 言語と系統関係 I

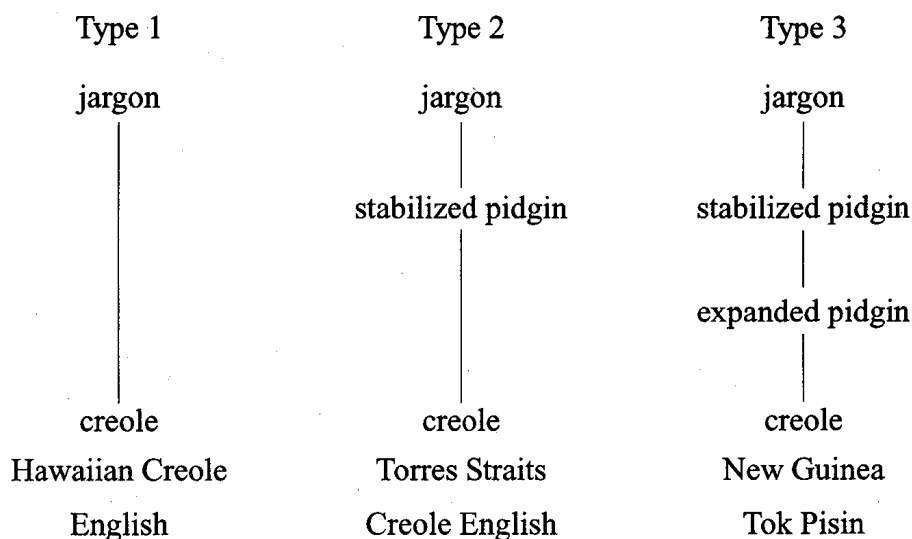


図 2

層上層のような関係を含まないし、ピジンが固定されるようなプロセスも含まない。むしろ多言語使用環境における言語選択、あるいはよりミクロ的に見た場合 code mixing などが規定要因と考えられる。

## 2. 社会的戦略の変化

言語接触によって新しい言語がかならず生じるわけではない。言語使用を社会的戦略と考えると、新しい言語の創出は新たな社会的戦略の選択である。たとえば2つの言語の話者グループGとRがあったとする。このGとRが接触する状況下で、Gの戦略とRの戦略が混合する戦略をMとすると、次の6種の戦略分布が考えられる：GR、GM、GG、MR、MM、RR。Gの立場から見れば前の3つの分布は戦略が基本的に維持されることを意味する。最初のGRという分布では、どちらのグループも自分の戦略を維持する。2番目のGMは、相手Rが戦略をGに近づけるように変更する状況である。3番目の分布GGは相手に自分の戦略を選択させて、その戦略をグループに共通のものとする、つまりGの戦略への統一を意味する。戦略分布がXXとなる、つまりグループの間に戦略的差が見られなくなる場合、言語的には接触状況にあったものが統一されるということができる。4番目のMRは相手Rの戦略によってGの戦略は中間的なMの戦略に変更されることを意味する。5番目のMMは混合戦略で、相手Rと共通の新たな第3の戦略Mが選択される。新しい言語の創出はこのような状況下

に起こる現象であるが、実際の戦略は環境によってさまざまに異なる。最後の RR では相手 R の戦略が G と R のグループに共通して選択されることになる。G の立場に立てば、前の 3 つ GR、GM、GG のような状況を言語維持 language maintenance、最後の RR のような状況を言語シフト language shift と呼ぶ。

基層や上層の影響というのは、言語シフトによって生じた RR グループの戦略 R が、接触以前の R グループの戦略と同じではなく、G よりに調整されていることを指す。基層、上層、傍層などの概念は言語的ではなく社会的なものであるが、戦略の選択に当たっての利得と関わるので<sup>2)</sup>、結果として得られる新しい戦略分布に影響を与える。

また、あるグループが何らかの要因によって別個の戦略をとるグループに分割されることがある。たとえば S という集団が C と P という集団に分化する場合、その要因はそれぞれが外部との収束状況にあることも考えられるし、集団内部の条件が異なってくることも考えられる<sup>3)</sup>。集団 S が収束によって生じていて  $S_1S_2$  という構造をとっていることが分化の要因となっている可能性もあるだろう。これらはすべて分岐現象であるが、それ以前の歴史的経緯が分岐の動機となることも十分に考えられる。収束は言語接触を前提とするが、分岐に対しては言語接触は要因のひとつに過ぎない。

## 2.1 変化の連続性

言語接触に起因する分岐や収束といった現象は、音声学的レベルから音韻論、形態論、統語論レベルさらには語用論レベルに至るまで幅広く認められる<sup>4)</sup>。バルカン半島の諸言語や西ヨーロッパ諸語においては収束による言語現象をいろいろ観察することができる。このような現象を対象とする地域言語学のスコープはかならずしも理論的とはいえ、より包括的な理解のためには系統関係と類型論的類似性が統一的に解釈できるツールが求められる。接触状況を特定しにくい言語連続体内部における方言的な差異にしても、現象としてはまったく異なる言語間と同じようなことが起きている。一方、クレオールや混成言語を生成するような言語使用環境ではこの連続体のあり方が通常と異なるであろう。このような環境では言語使用そのものが社会的環境の直接的な要因となるからである<sup>5)</sup>。

### 3. 言語変化の方向性

2で述べたように、言語接触に起因する言語変化における変化の方向には一定の法則性を見出すことができる。基本的には、①対象となる言語がその範囲で漸進的に調整される：言語維持、②対象となる言語話者グループが戦略として使用言語を変更する：言語シフト、③対象となる言語が接触相手と妥協的な中間的戦略すなわち新戦略を選択し、新しい慣習としての言語を創出させる：言語創造、の3パターンがある。

パターン①のように、言語Bと接触する言語Aが漸進的な調整局面にある場合、語彙要素はもっとも容易に借用される。文法的要素は言語Aの特性を示すものであり、より保持されやすい。なかでも形態論的な特徴がもっとも最後まで保持されやすい。音韻論的な特徴や統語論的な特徴は形態論的な特徴よりも調整されやすい、つまり言語Bの影響を受けやすい。言語Aが言語Bとの接触を動機として言語Aの範囲で漸進的に調整される場合には、語彙の借用がもっとも生じやすく、形態論的な借用は最終段階まで持ち越される。

パターン②のように、言語Bのグループと接触する言語Aの話者が戦略として言語Bを選択する場合、社会的グループとしてのAは分断される可能性がある。Aから調整されたBであるB'へと戦略を移行させたグループでは、言語AからB'へ語彙が持ち込まれる可能性は低い。BとB'の差は音韻論的・統語論的により明らかとなることが予測でき、形態論的な特徴が持ち込まれることは少ないだろう。B'の特徴はAの特徴と密接に関連する。B'とBとの隔たりは、Aからの戦略の移行プロセス（時間的・空間的）に際しての戦略を移行させるグループ全体（グループA全体ではない）における言語Bの習得の程度に従って規定される。B'は、習得が不完全であるほどAの干渉を強く受けた特徴を多く示す。言語Aの話者が言語Bとの接触を動機として使用言語をBに変更しようとする場合、習得が不完全なほど文法的特徴がAに近い状態で保持される傾向が強い。言語Aから語彙が借用されるのは言語移行では周辺的現象に過ぎない。

パターン③の場合には、ピジンやクレオールあるいは混成言語などが生じる。これらは関連する言語を含む多言語状態が継続するかどうかを基準として2つに分類できるだろう。継続する場合には、後述する言語捻合やcode mixingなどの現象が生じる。この場合言語的な単純化は目立って起

こることはない。それぞれの言語の構造的特徴は維持される傾向が強い。これに対して多言語状態が維持されない場合、構造的単純化は顕著な特徴となるだろう。

いずれにしても、形態論的な範疇の個別性に注目すべきである。言語としての個別性は形態論にもっとも強く現れる。形態論は統語論よりも抽象度が高く、音韻論よりも恣意的である。語彙がある言語の背景となる文化や考え方を具体的に反映するものであるのに対して、形態論的特性は抽象化の仕方において個別的である。一般的に言って名詞は語彙的であり動詞は文法的で、後者は言語によって度合いが異なるものの、文法的表現の基盤となることが多い。文法などの抽象的な概念は、動詞に語彙的な語根に付随して現れる可能性が高い。

### 3.1 借用

借用でもっとも最初に起こるのは語(彙)借用である。供給側からの文化的・社会的あるいは経済的圧力が長期間に及ぶような場合には音韻論的、音声学的、統語論的特徴が借用されることもある。形態論的な特徴が借用されるとすればこの圧力は極めて高いことが予測される。形態論的調整の可能性はあってもしばしば観察されるものではない<sup>6)</sup>。このような広範囲の借用は、必要条件ではないにしても短期的ではない二言語使用が背景となることが多い。

語彙的要素に対する構造的(あるいは文法的)要素に及ぶ調整は、細分化された状態では起こらない。語彙の借用に伴って起こる音的特徴の受け入れなどを別にすれば、少なくとも一定規模以上に調整が認められる場合<sup>7)</sup>、音韻論的な調整が見られればそれに見合う程度の統語論的調整が予測できる。音韻論的特徴を受け入れる程度の第二言語の知識があるならば、なんらかの統語論的特徴を受け入れる素地はある。これに対して統語論的特徴は知識として獲得することができるため、音韻論的な調整を必ずしも予測させない。両者は独立した現象であって、より上位のシステムを介して関連している。

供給側の言語があるカテゴリーを統語論的に表現し、受け手側が形態論的な手段でこれを表現していたとする。この場合、受け手側の言語は統語論的な手段を借用する可能性が大きい。逆に受け手側が統語論的で送り手側が形態論的な表現をとっていた場合には、この統語論的手段を捨てて形

態論的な表現を借用する可能性は低い。これは形態論的表現の有標性 *markedness* が統語論的なものよりも高いというより、形態論的な構造のほうがより個別言語に固有であるためであろう<sup>8)</sup>。

このような傾向は、文法化に見られる具体的表現から抽象的表現への移行プロセスと並行的である。一般に言語において形態論的な側面の有標性が高いのはこれが言語の記号性の中核をなすものだからである。したがって戦略の調整において、もっとも強固であり戦略の変更にあたっては（完全ではないにせよ）最初に取り入れられるべき要素となるのは当然である<sup>9)</sup>。

### 3.2 戦略としての言語変化

Thomason and Kaufman (1988) は、言語接触においては社会的要因（言語外的要因）を第一の規定要因としているが（pp. 35-6）、内的外的という区別は言語変化に対してはあまり意味がないだろう。言語変化という現象は、言語を運用する個人が言語知識を根拠に他者との交換を最適化しようとするところに動機があり、問題となる個人は意識的にも無意識的にも調整を行う。当該言語の類型的特徴もまた変化を規定する。内容的類型論における3つのパターンは理論的な均衡状態を示すものである<sup>10)</sup>。言語的に安定状態にある言語を使用することは、言語使用による利得を最適化することにもつながる。これらパターン間に見られる変化の方向性を考慮してみると、すべてのパターンはナッシュ均衡的ではあるが、進化的安定戦略に類するものではない。個々の言語接触における利得の最適化に対して、言語外的ではない規定要因を想定することは必要かつ可能な手続きと思われる。

パターン②のような状況で生じる不完全な習得による言語 B の亜種 B' は、言語 B という視点からは変種の一つである。新しく成立した言語 B および B' の話者グループにおいて、本来の言語 B の話者グループが B' の特徴を受け入れる可能性は B と B' のグループ間の社会的関係などに規定される。B' が支配的であったり、B' が数的に優勢であるような場合、B の B' の方向への調整が起こることは十分考えられる。これらは個人の言語使用における利得の最適化というパラメータによって規定されており、この利得には言語内的条件も言語外的条件も反映されている。プレステイージュ

の高い言語からの借用が生じやすいのは、このような慣習に従うことが社会的に有利、すなわち言語使用にあたって最適化されているためと考えられる。“借用する言語の話者にとってプレステイージュがないと見なされる言語からはなにも借用されない”というのは常識に囚われた考え方である。

パターン①とパターン②の差は調整速度にも現れる。①のパターンで構造的な借用が行われるようなケースは通常長い年月にわたる言語的な接触を必要とする。これに対して②のパターンでは一世代以内に起こることもありうる。①はいずれにしても漸進的プロセスであること、②のプロセスには断絶が含まれているということを考えれば、これらのことは容易に理解できる。基層からの干渉は比較的容易に表面化する。逆に本来のBの話者がB'への調整を行うと仮定するときは漸進的プロセスは長期間に渡る。

②のようなプロセスが長期間にわたる場合、安定した二言語状態が継続する必要がある。このような状況では習得は完全なものに近づくため、BとB'の差はわずかなものとする。この場合、双方の言語話者が一つの社会的単位を形成しそのなかでの言語維持がすべての成員に拡張して起こっているため、典型的な言語シフトは生じない。

AとBの差が類型的な利得の差を反映している、たとえばBが進化的安定戦略であってAはそうではないような場合には、調整が不可逆的であることも考えられる。言語Aの話者がBにシフトすべき環境が一度生じた後に再びAが有利な戦略になったと考えれば、調整速度が速ければAは有利な戦略である言語Aの使用を維持できるが、調整速度が十分遅ければB'の使用はAの使用に対しても有利な状態が一時的に生じているので、B'の使用が維持される。調整速度が速い場合にもっとも調整が遅れる部分をもっとも強固な慣習と呼ぶことができる。前述のように一般的に言語の構造的部分のなかでもっとも強固な慣習といえるのは形態論的な要素である。屈折などの抽象的な範疇はそれだけ借用されにくい。

方言間の調整では、類型論的な隔たりが個別言語間と比べて少ないため、複雑な形態論的要素の容易な借用が見られる。しかし類型論的隔たりが大きくても構造的な要素の借用が見られる場合がある。これを社会的な圧力(方言の場合には意識的な標準化圧力)の言語的要因に対する卓越性に帰するのは、逆の現象も考えられる以上一面的である。なんらかの理由である慣習を選択するのが有利であれば、それが言語的か非言語的慣習に関係



なく選択される。新しい慣習がそれまでの慣習の束からみて異質なものであって、それによって慣習の束全体が調整されるような場合には2つの結末が考えられる。それが有利ではないと判断できる時間的あるいは自覚的な余裕があれば、選択は中止されるだろうし、そのような余裕がないならば慣習は選択され、慣習の束もそれをも含んだ状態で最適になるように調整されるだろう<sup>11)</sup>。

#### 4. 特殊な言語変化

クレオールと語彙供給言語はいわゆる系統において無関係である。クレオールの文法的構造は語彙供給言語のものとは異なるし、基層となっている言語とも明らかな一致を示すことはない。クレオールの文法的性格の由来については基層説と言語普遍説の2つの立場がある。基層説を採る研究者も、ピジン・クレオール化のプロセスにおいて、接触状況にある当該言語の特徴と直接結びつかない何らかの改変が生じていることは認めるであろう。

少なくともピジンやクレオールのような言語の創出に対して、系統関係からの断絶によって言語が成立するという点で、分岐とは別に、断絶 *abruption* という概念を導入しておく。ただし断絶が生じてもおかしくない環境であっても、接触する言語の系統関係が近い場合、断絶が生じないあるいは覆い隠される可能性がある<sup>12)</sup>。

ピジンの生成に当たっての語彙供給は経済的に優位にある言語から行なわれることが多い。ピジンはグループ内部の言語ではなく、他の言語を使用するグループとの間に用いられる。その性格上、語彙は限定され、もとなる言語の文法的特徴の多くは保持されない。ピジンは必ずしも(社会的、経済的などの面で)優位なグループと劣位のグループとの接触で生じるわけではない<sup>13)</sup>。

クレオールをピジンあるいはジャーゴンの段階を経て成立するものと規定すれば、上記のような性格は継承されるだろう。しかし実際のクレオール化には社会的条件が満たされる必要がある；ある言語話者のグループが経済的に優位にあるような多言語使用状況でクレオール化は起こる。この点がピジンとは異なる。

## 5. 混成言語

言語接触に起因する母語話者を持つ新しい言語の創出のパターンとして混成言語という概念を示した。たとえば Bakker and Muysken (1994) では5つの言語が混成言語として挙げられている。次の例はケチュア語 Quechua とスペイン語との混成言語と考えられているメディア・レングア Media Lengua の例である。

- (1) miza despewisitu kaza-mu i-naku-ndu-ga ahí-bi buda da-naku-n

Media Lengua

miza k'ipa wasi-mu ri-naku-pi-ga, chi-bi buda ku-naku-n Quechua

mass after house-to go-PL-SUB-To there-LOC feast give-PL-3

yendo a la casa después de la Misa, ahí dan una boda

Spanish

“Going home after mass, they then give a feast here”

Bakker 1997: 196

イタリックはメディア・レングアのケチュア語要素を示している。この言語はケチュア語とスペイン語と並び母語としてもあるいは第二言語としても使用されている。語彙的要素はスペイン語、文法的要素（音韻論、形態論、統語論）はケチュア語と対応している（Bakker 1997: 196）。とくに文法的要素に単純化の傾向がまったくといってよいほど見られないことは注目に値する。この点で混成言語はクレオールとはまったく異なる。

新しい言語の使用が新しく生成されるグループ内部で生じるという点で、混成言語が成立する現象は系統関係からの断絶を含む。混成言語を母語とする集団には、経済的優位性のような条件を持つクレオールの場合とは異なった前提を想定する必要がある<sup>14)</sup>。混成言語の場合、新しいグループとそれに伴う言語の創出という点では断絶的であるが、系統関係が認められる要件である語彙的かつ形態統語論的な要素を共有する点で系統関係の上に位置づけられる分岐でもある。

混成言語の発生プロセスには断絶を生じさせるような社会的背景があるが<sup>15)</sup>、系統的連続性は連続的な言語使用を背景として保たれる。クレオール化においては社会的断絶がグループとしての言語の系統的連続性の存続を許容しない。これは2つのグループの接触によって生じたグループ間の

言語（たとえばピジン）が固定化される条件でもある。一方混成言語の成立する前提条件はグループ内部の二言語使用状況である。混成言語の定義はいろいろ可能であろうが、シンプルな Bakker (1997) による定義は次のとおりである。

A mixed language is a language that shows positive genetic similarities, in significant numbers, with two different languages.

p. 195

この定義に従えば、言語Mの語彙が別の言語Aから供給されていたとして、文法システムがAのそれとは異なっていて、さらに他の（クレオールを除く）どの言語とも特徴を共有しないならば、このMは混成言語ではない。したがってクレオールは混成言語ではない。ピジンのうちのあるものは混成言語と同様の特徴をもつ可能性が指摘されている。しかしながら、単純化というプロセスを示す点で、これらのピジンは混成言語そのものとは区別されるべきである。

借用は系統関係からの断絶のプロセスが含まれないという点で分岐的である。大規模な借用によって文法的要素まで借用されるような場合でも、語彙的借用から文法的借用という方向性は間違いなく観察されるため断絶とはいえない<sup>16)</sup>。この点で断絶と分岐という2つの側面を持つ混成言語と、大量の借用が認められる言語とは区別される<sup>17)</sup>。たとえば英語におけるロマンス語的要素は借用されたものであって、借用がどれだけ大規模であってもゲルマン語としての系統関係は揺るがない。

## 5.1 社会的背景と言語捻合

Bakker (1997) によれば混成言語には語彙的要素と文法的要素の供給言語がそれぞれ異なるという共通性が見られる (p. 202)。通常、これらの要素は混成言語生成に当たって単純化されない。異なる言語の語幹と affix が組み合わされる現象がすべての混成言語で見られる。このような現象を Bakker and Muysken (1994) および Bakker (1997) は言語捻合 language intertwining と呼び<sup>18)</sup>、さらに2つのタイプへ集約させている。ひとつめは“秘密のこぼれ”として話される混成言語（ノマドタイプ）、このタイプは異なる言語を話す他者とのコミュニケーションギャップを埋めるもの

ではなく、グループ内の結束を高め、非グループ構成員を明確に区別するためのグループ内言語である。Bakker (1997) は、このタイプにロマなどの放浪者、二言語使用の交易従事者などの言語を含めている。このタイプはその地方（彼らのではない）の言語の文法的要素とその土地のものではない（彼らの）言語の要素とによって成立している。

もうひとつは周辺のグループからの区別や新しい（混合した）民族的な自立性を表現する言語としての混成言語（混合エスニシティタイプ）である。両親が異なる言語を話すような可能性はどこにでもあるが、ここからすぐに新たな民族的グループが生じるに至ることはまれであろう。通常は父親か母親のグループの一員として（さらに場合によっては周辺的なものとして）認識される。彼らの間で世代が進み、このような混合的起源を持つ個人の数が増加すると、どちらのグループの成員でもないという認識が強まり<sup>19)</sup>、独自のグループとなる可能性がある。彼らは起源となっている2つのグループの文化的要素を用いて新しいグループを形成する。このようなグループでは混合性がアイデンティティとなる。このタイプでは、母親の言語が文法的要素を供給し、父親の言語が語彙を供給する傾向が強い。その理由の1つとして Bakker (1997) は、混成言語が生じる環境では、移住してくるのが男性で女性はその地域出身であることを挙げている (207-8)。

混合婚の数が十分にあり、社会的環境を一定に保とうとする外的な圧力がなく（学校システムや統合的圧力、経済的支配など）、外部から二言語話者が独立したグループとして捉えられ、かつそのグループの構成員たち自身も自分をどちらの言語話者グループとも結びつけない場合、混成言語が生じる可能性がある。このようなグループの構成員が2つのグループへの帰属を意識する場合、二言語使用およびその十分な運用能力を前提とした code mixing が習慣化され混成言語は生じない。

## 5.2 混成言語の文法的特徴

混成言語は文法的要素を提供する言語Aと語彙的要素を供給する言語Bとが組み合わされたものである。文法的形態素はAあるいはBのどちらからでも供給される可能性があり、同じ言語内部においても複合的な可能性がある。Bakker (1997) は図3のような要素の分布を想定している (p. 210)。

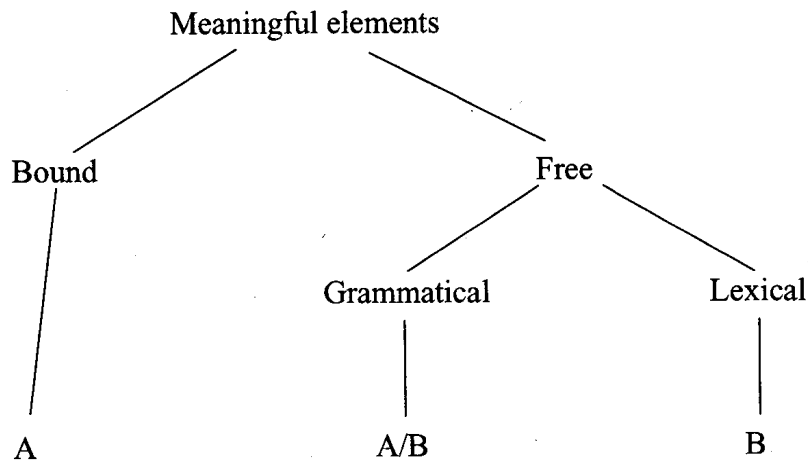


図 3

文法的形態素には屈折と派生の区別があり、自由文法形態素とは文法形態素としての連続体を形成している<sup>20)</sup>。同様に、文法的要素と語彙的要素の間の差も漸進的な区別でしかない。文法的要素のプロトタイプ（動詞の屈折など）と語彙的要素のプロトタイプ（具体的名詞など）とが両端にあって、おそらく頻度を基準としてそれぞれの方向から処理が進むのであろう。混成言語が創出された後、もとなる言語がさらに維持される場合、どちらが維持されるかによって影響される範囲が変わる。文法的要素を供給する言語が維持されれば、より文法的要素のプロトタイプから離れた要素も取り入れられる可能性が高くなる<sup>21)</sup>。

## 6. 混成言語としてのミチフ語

Bakker (1997) によれば、カナダに見られる本来のクリー語 Cree 話者を軸としたフランス語との接触によって、次のような3つの状況が生じている (pp. 118-60, 161-91) :

- a. Il-a-la-Crosse French-Cree
  - b. French-Cree code mixing
  - c. Michif
- a : フランス語からの大量の語彙借用によるクリー語の変種。  
 b : フランス語（の地方変種）とクリー語の二言語使用者による code mixing (positive identification)。フランス語もクリー語もそのまま維持されている二言語状態。

- c: フランス語とクリー語の二言語使用から *negative identification* によって生じた混成言語: ミチフ語。二言語使用は周辺の現象となっている。

系統関係という観点からすると a はクリー語の分岐であって断絶現象ではない。これに対して c は新しい言語であり、その意味で断絶である。しかしながらミチフ語はクリー語ともフランス語とも系統的な類似性が認定でき、混成言語である。次の (2)、(3) はミチフ語の例である (Bakker and Muysken 1994: 45-6)。

- (2) *Kî-nipi-yi-wa son frère aspin kâ-la-petite-fille-iwe-t.*  
ST-die-OB-3SG his/her brother since COMP-the-little-girl-be-3SG  
'Her brother died when she was a young girl.'
- (3) *John kî-wêyisim-êw Irene-a dans sa maison kâ-pihtikwê-yi-t.*  
John PA-lure-3SG.3O Irene-OB in 3SG house COMP-enter-OB-3SG  
'John lured Irene into his house.'

Bakker (1997) は a とミチフ語とをそれぞれ独立した現象と捉える (p. 148)。また b と c の表現形はある場合にクリー語およびフランス語要素の分布などでかなり似た特徴を示すが、示さない場合もあり、共時的には表面的現象である (p. 191)。ミチフ語が生じるプロセスでは *code mixing* が重要なファクタと考えられるケースがあるが、これだけが規定要因であったわけではない。ミチフ語は語彙供給言語と文法供給言語とに分けられる一般的な混成言語とは異なる。基本的に名詞的要素はフランス語、動詞的要素はクリー語に由来する。クリー語はいわゆる抱合語的性格を示しており、動詞は明確な語根を持たず *affix* の組み合わせから形成される。これはミチフ語の混成言語としての特異性と密接に関わるが、混成言語の定義を揺るがすものではない。さらにフランス語要素の一連(たとえば名詞句)においてもフランス語として非文法的な場合があることは、*code mixing* でも借用でもない混成言語としてのミチフ語の性格を反映している<sup>22)</sup>。

上述のようにクリー語はいわゆる語幹を欠いており、動詞は抽象的な機能を示す接辞の組み合わせからなっている。ミチフ語が生成されるプロセ

スでは動詞は文法としてもっぱらクリー語から取り入れられ、語彙的要素の供給源であるフランス語からは導入されなかった。つまりミチフ語の混成言語として特殊性はクリー語の類型的特性に由来する。接触による言語現象の検討には関与する言語の的確な分析が不可欠なことは、この例からだけでも明らかである。

言語類型が異なる場合の極端な例としてミチフ語のようなタイプの言語が生じることは十分考えられる。一方言語類型的に近い言語同士が接触し、二言語状態して混成言語あるいはこれに近い状況が生じるならば、文法的要素と語彙的要素の区別は必ずしもない。同じ言語にいくつかの lect が認められる場合、それぞれの由来が同じとは限らない。

## 7. インド洋フランス語系クレオール

類型的に近く、かつ地域的に隣接した分布を示している場合、同じグループとして分類される可能性が高い。しかしながら Romaine (1988) の指摘するようにレユニオン、セイシェル、モーリシャスなどの各言語をまとめてインド洋フランス語系クレオールという名称を与えるのは適切とはいえない (pp. 18-9)。それぞれの背景は異なるだけではなく、大きな文脈から見た場合、クレオールかどうかの妥当性もそれぞれの言語で異なる<sup>23)</sup>。ここではレユニオンとセイシェルの概要を示すことで非言語学的説明の必要性を指摘する。

レユニオンはフランスの海外県で、マダガスカル沖600キロほどに位置する火山島である。人口はおよそ76万人。そのうちカトリック信者がおよそ89%、公用語はフランス語であるが、これ以外にレユニオン語と呼ばれる言語が一般的に使用される。レユニオン語はフランス語を母体とした言語で、使用人口は全人口の64%およそ50万人である。これを現地ではクレオール Créole と呼ぶが、いわゆるクレオールとは呼べないもので、かつフランス語とも異なる。この母体は植民の始まった17世紀の植民地フランス語と呼ばれる船乗りのあいだで使われたリングフランカのフランス語や植民地化に伴って移植され再編されたフランス語を母体とする言語から影響を受けたフランス語である。レユニオン語は少なくとも典型的なクレオールではなく、Holm (2004) で定義される部分的再編言語 *partially restructured language* に分類される。レユニオン語は多くのクレオールの特

徴を示すが、非クレオール的性格（フランス語的性格）も併せ持っている。社会的特徴として部分的再編言語の特徴でもある言語的階層分化を挙げる事ができる。いずれにせよレユニオン語のクレオール性、非クレオール性については長い議論があり、またさらにレユニオン語がイルドフランス・フランス語クレオールの母体であるかどうか、つまりはインド洋クレオールあるいはブルボン・クレオール *Créole bourbonnais* という集合を認めるかどうかの議論もある。少なくともイルドフランス・フランス語クレオールは地理的分布のみからではなく歴史的社会的にも一体性を持っている。

## 8. 植民史と言語史

### 8.1 レユニオン

1511年にポルトガル人が上陸した時レユニオンは無人であった。1663年にマダガスカル人を連れたフランス人が植民を開始、1665年に正式な植民地となって以降1848年の7月王政崩壊まで、革命期にレユニオン、ボナパルトと改名された時期を除いてブルボン島と呼ばれていた。1671年の人口は白人36名マダガスカル人37名、島で生まれた混血児が3名であった。ダマンやサラータあるいはフランス領インドのポンディシェリから連れてこられたインド系ポルトガル人女性を含めて1686年には総人口269人中144人がフランス人の父とマダガスカル人およびインド系ポルトガル人の母の子供であった。この年には36人のフランス人男性の家庭においてその妻は12人がインド系ポルトガル人、14人がマダガスカル人、10人がフランス人で、残りの53人はマダガスカル人とインド人の奴隷であった。レユニオン語の生成には初期の社会環境が大きく関係している。

1711年に自生のコーヒーが発見され1715年からはプランテーションによるコーヒーの栽培が始まり、さらに1718年にはイエメンからモカが導入されて、コーヒーはレユニオンの主要産業として奴隷の大量流入を招き、下図に示すように人口構成に大いに影響を与えた。1700年には約700人だった人口は1717年には2,000人、1763年にはおよそ2万人、1789年には5万人を突破している。1689年から1789年の間、自由民も急増しているが、奴隷の増加率はこれをはるかに凌いでいた。

奴隷は主としてマダガスカルや東アフリカから供給されたが、インドや



言語と系統関係 I

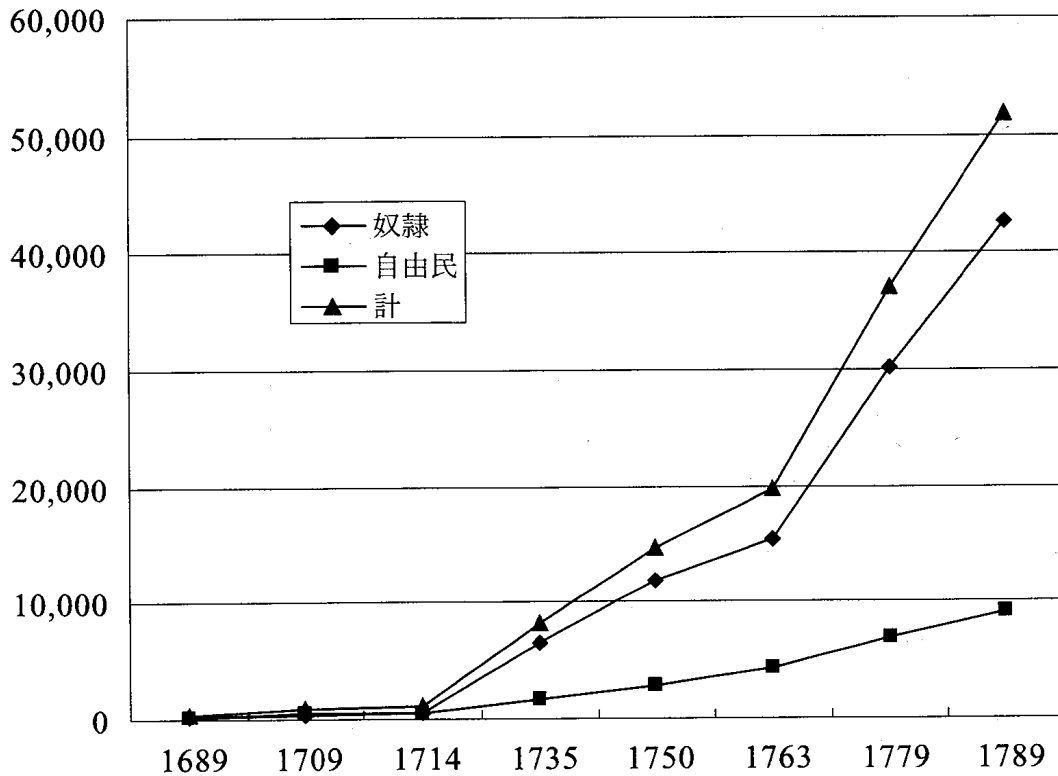


図4 初期レユニオンにおける人口構成推移

西アフリカから運ばれる例もあった。奴隷比率の急増はクレオール化を招いたのであるが、レユニオンのフランス語はすでにこれ以前の植民初期に現在へいたる道筋を歩み始めていた。1715年から23年の間の現地の判決文資料には今日のレユニオン語に見られる特徴が現れている<sup>24)</sup>。Baker and Corne (1982) はフランス語 *l'était qui* に由来する特徴的な用法を初期植民者特有の言語の名前 *lete ki French* に用いている。彼らはこの“*lete ki French*”について、フランス語を第二言語として習得した妻や奴隷のフランス語から影響を受けたもので、のちに彼らの子供の世代において第一言語となったものと解釈している。いずれにせよ奴隷が大量流入する以前にはまだ自由民が多数を占めており、彼らの少なくとも父親はフランス語を母語としていたため、住民のフランス語母語話者との接触機会は失われていなかった。レユニオンの特徴は、すべてがクレオール化したわけではなく、これと並んでむしろ植民初期の言語状況を色濃く反映する *lect* も存在することにある。のちの社会的な変動つまりプランテーションの導入に至っても、このようなフランス語との接触を保つことのできた層の存在は大規模な再編を抑制するファクタとしても作用したと考えられる。奴隷が大多数を占

めるに至った18世紀後半、彼らの言語習得状況はピジン化とクレオール化を軸に変容していったであろう。この言語は植民初期からの言語を残す層よりクレオール的であって今日のレユニオン語の別の lect に連なっている。

レユニオンに近いモーリシャスではまた状況が異なっていた。モーリシャスではフランス語話者に接する機会のほとんどない非フランス語話者層を大量に含んだ言語的再編が行われ、大規模なクレオール化が進行し、現在のモーリシャス・クレオールに繋がっている。

言語使用の社会的階層分化にはフランス語へのアクセシビリティが関与している。レユニオン語の共同体内は基本的には断絶的ではなく lect として連続的な言語的変異が認められる。Chaudenson (1974) は典型的な3つの lect を次のように設定している。

低地クレオール (アフリカ人、マダガスカル人、インド系) 海岸沿い

高地クレオール (高地の白人)

都市部クレオール フランス語の影響がかなり強い

このような言語社会学的分化にはいうまでもなく歴史的背景の説明が不可欠である。Holm (2004) は概略次のようにその経緯を示している。フランスの共和制による1794年の奴隷解放はレユニオンにおける植民者の間に反発が生じさせたが、イギリスの攻撃によって中断した。ナポレオンは1803年に奴隷制を復活させた。1810年になるとイギリスはレユニオン、モーリシャス、セイシェルを占領し、1814年にレユニオンのみがフランスに返還された。モーリシャスの行政機関や経済的支配から切り離されたレユニオン島はこの後コーヒーに代わってサトウキビ栽培を拡張させた。7月王政が崩壊した1848年にフランスにおいて奴隷制は完全に廃された。当時の人口はおよそ11万人のうち6万人が奴隷であったが、解放された奴隷の多くはもとの使用者のところで働くことを拒否し、多くがすでに混血の Maroon たちが移り住んでいた島の中心部の平原に移った。他方移民の流入が続いていたことと出生率が高かったことが要因となって、白人の農場の経済的状況は18世紀後半から悪化していた。子供に均等相続されるという方法も農地の細分化を招き、この傾向を助長した。結果、多くの白人はより貧困化し、Maroon や解放奴隷が住む中央高地へ移住するもの

もいた。彼らは当該地域の非白人と区別するため *Petits Blancs* と呼ばれた。この高地での混交がレユニオン語の後の性格付けに大きく作用している。

*Petits Blancs* は生活習慣においては狩猟生活を送っていた *Maroon* と同化し、また混交によって外見も大きく変化しているにも関わらず白人であろうとし、とりわけ言語習慣に関しては維持を志向した。よりクレオール性格の強い低地クレオールに対して植民初期からの特徴を残す高地クレオールは、フランス語との絶え間ない接触によって維持されている都市部の言語とともに、レユニオンの言語使用の独自性を示している。とはいえレユニオンは現在でもフランス領であり、それゆえクレオールの地位は従属的である<sup>25)</sup>。

## 8.2 セイシェル

セイシェルはフランスの海外領土であるレユニオンとは異なり独立国で、人口は2004年の統計によれば80,832人である。住民の多くは自らを独自の文化と社会を持つセイシェル人 *Seychellois* であると考え、比較的均質なヨーロッパ系とアフリカ系の融合したエスニックグループを形成している。彼らの言語は *Seychellois Kreol* あるいは *Kreol* と呼ばれるクレオールである<sup>26)</sup>。他のインド洋諸国とは異なり、主としてインド人と中国人とからなるアジア系住民は少数であるが、アジア系と多数派との混交はかなり進行している。もともとのフランス人入植者の子孫である約20家族からなる *grand blanc* と呼ばれる農場主のグループが有力者として存在してきたが、独立以来の社会主義政権のもとでかつての威光や経済的支配力は失われている。

セイシェルではクレオール、英語、フランス語の三言語がすべて公用語として認められている。1990年の統計で人口の94%はクレオールを母語としていることもあり、初等教育における読み書き学習を容易にすること、また独自の文化・遺産を確固たるものとする目的で、独自性の象徴であるクレオールは第一言語として重用されている。クレオールの標準化を進める現体制の政策について、これに反対する勢力は、英語とフランス語のバイリンガルであることが *Seychellois* にとっての利益であり、英語フランス語を差し置いてクレオールを学習言語とすることはこれを阻害すると主張している<sup>27)</sup>。

セイシェルにおけるクレオールも最初の植民者の言語であるフランス語

を出発点としている。フランス人植民者は1770年にモーリシャスから奴隷を伴って入植を開始した。Holm (1994) が引用する Papen の研究によれば1803年の人口構成は2,121人中奴隷86%、解放奴隷4%、白人10%であった(p. 401)。奴隷の人口が占める割合が大きく、かつこの奴隷がモーリシャスから導入されたことから推測できるように、セイシエルのクレオールはモーリシャスのそれとわめて近い関係にある。レユニオンとモーリシャスの言語については植民初期のクレオール創出時に関連を認める立場と認めない立場がある。モーリシャス、セイシェルなどのクレオールの総称であるイルドフランス・フランス語系クレオールとレユニオンのクレオールの系統的関係の議論はここから始まっている。セイシェル・クレオールの語彙供給言語はフランス語であるが、その他マダガスカル語、バンツ語、英語、ヒンディー語からの語彙も含んでいる。統語的にはバンツ語とフランス語の混交といえる。正書法は政府によって1981年に制定されている。政府を後ろ盾とした Kreol Institute は辞書の編纂や文学コンテストの開催、翻訳方法の指導、外国人向けクレオール教科書の用意などによってクレオールの振興を図っている。

ナポレオン戦争後1815年のパリ条約以降セイシェルはモーリシャスと一体の英領であった。そのため独立後の現在でも英語は政府や商業の言語である。セイシェル人の三分の一以上は英語の運用能力があるとされる。議会ではクレオールやフランス語も使用されるものの、基本的には英語が使用される。主な新聞雑誌は三言語の記事を併載している。ルネおよびその後継であるミシェル政権下<sup>28)</sup>では植民地主義者の言語として軽視されがちなフランス語であるが、人口の9割を占めるカトリック<sup>29)</sup>の言語として威光は保持されている。テレビ番組のおよそ40%はフランス政府の提供する地上局を経由したフランス語による衛星放送である。このことも手伝って多くのセイシェル人はフランス語を理解することができるといわれる。

## 9. 今後に向けて

レユニオンとセイシェル両地域において新たに創出された言語の現在の地位は歴然と異なっている。レユニオンではフランス領としてフランス語(あるいはフランス語に近い都市方言)が第一言語として用いられクレオー

ルはプレステージュの点で明らかに劣るのに対し、セイシェルでは社会主義的政策によって推進されたクレオール的第一言語化によってその地位が確立されている<sup>30)</sup>。植民当初の言語的環境が大きく違うことは想像しがたいが、とくにその後の奴隷解放との関連でレユニオンでは白人の一部が独自の層の形成を目指したのに対し、セイシェルではその段階で解放奴隷が人口の多くを占めていたため、このような現象は生じなかった。両言語間に類型的類似性を認めることはでき、また系統的な関連も議論の対象とはなっているが、これについては決定的な説はない。ここまでいくつか具体例も含めて議論したように、言語変化のパターンはある程度戦略的モデルによって説明できるが、このように個別的問題については包括的に見渡せる系統樹に代わるモデル化が望まれる。伝統的な言語の系統分析はツールとしてあまりに不十分であり、形質の動態的特性を見渡せる分析軸を持った新しい理論が必要を感じる。

#### 注

- 1) 詳細な定義については Thomason and Kaufman 1988, Arends et al. 1994などを参照。
- 2) 通常、社会的上位グループの戦略の採用はより多くの利得をもたらすものである。
- 3) たとえば気候の違いによって生産性に差が生じるようなことも考えられる。
- 4) 接触による影響の言語的レベルによる差が想定できる。たとえば言語維持による影響では借用が中心的、言語シフトの状況下では音韻論的、統語論的な影響が中心的。維持側は、自分の戦略を相手に合わせて多少変更する場合にもっとも導入しやすい分野から行う。またシフト側では、本来の自分の戦略のうち変更しなくても相手に受け入れられる分野が最後まで変更されずに残される。
- 5) 混成言語の生成にあたっては code mixing が重要な役割を果していると考えられる。
- 6) Thomason and Kaufman 1988: 38
- 7) ここでは Thomason and Kaufman 1988 の moderate—heavy スケールを念頭に置く。
- 8) 形態論自体がコアなのではなく、それを構成する特徴が習得を困難にしていると考えるべきである：... it is not morphology itself that is marked and

unlikely to be transferred from one language to another; rather, it is certain common features of morphological structure that often, but not always, make morphology hard to learn. Thomason and Kaufman 1988: 57

- 9) 不完全な習得では個別言語に固有の特徴から順に落とされていると考えられる。
- 10) この議論については山口1995を参照。
- 11) この見解は次の表明と一致すると考えられる：  
... although we have no definitive evidence to support it, our tentative hypothesis is that in cases of light to moderate structural interference, the transferred features are more likely to be those that fit well typologically with corresponding features in the recipient language (Thomason and Kaufman 1988: 54).
- 12) おそらくもっとも知られているのは Dane law における古英語方言と北ゲルマン語方言との接触による英語の変化であろう。一般には文法的形態素に属する要素および基礎語彙を中心として借用が行なわれたとされる。これが系統や類型の特徴を異にする言語間の接触であったなら、英語はゲルマン語としての特性を多くの部分にわたって失い、明らかに断絶と認定されるような状況もありえたと思われる。北ゲルマン語方言と西ゲルマン語のうち北海グループに分類される古英語諸方言は典型的に近いため“相互に理解可能であった”のかも知れない。もちろん証拠はないが、相互に習得がより容易であったのは確実であろう。この状況で起こった現象が単に重い借用 heavy borrowing であったのか、より収束的現象（相互の調整）であったのかの判定は困難である。前者だとすると、語彙的要素の借用が比較的少なく、Thomason and Kaufman (1988) の指摘する重借用の基準に合致しない。
- 13) Holm 1989: 621-4に述べられている Russennorsk などはこれに相当する。
- 14) たとえばメディア・レングアの社会的環境を考えてみればよい。
- 15) これに規定されているわけではなく、否定的ではあるが自己認定 identification を動機としていると考えられる。
- 16) Thomason and Kaufman 1988: 100-8
- 17) 混成言語には通常の語彙借用が認められる：Bakker 1997: 202
- 18) 詳しくは Bakker and Muysken 1994: 42 and Bakker 1997: 203.
- 19) Bakker (1997) では negative identification という用語が用いられる。p. 208 参照。
- 20) see Bybee (1985)
- 21) Bakker 1997: 211
- 22) Bakker 1997: 233ff
- 23) Mühlhäusler (1986) はピジンおよびクレオールを一つの位置に必要以上に関連付けるのは好ましくないと指摘する (p. 14)。
- 24) Holm (2004) は次のような例を Hull (1979: 212 未見) から引用している (p.

65)。

moin la parti maron parce qu'Alexis l'homme de jardin l'etait qui fait moin trop l'amour. "I ran away because Alexis, the gardener, made amorous advances."

la は現代レユニオン語では完了の、lete ki は継続的過去 (imperfective past) のマーカである。

- 25) それぞれの lect の分析によって社会と言語の関連への理解もより深まる。本論では言語現象に関する議論はできなかったが、この部分は稿を改めて論じたい。
- 26) もちろんレユニオンのクレオールとは別の言語である。
- 27) セイシェルでは9年間の義務教育が行われている。最初はクレオールで教育がなされ、3年次から英語が加わる。フランス語は6年次から。1991年の識字率は85%。
- 28) その他英国国教会が7%など。
- 29) マンカム大統領のもと1976年に独立した翌年ルネ首相がクーデターで大統領となった。さらにその翌年社会主義的政策を採るセイシェル人民進歩党 Seychelles People's Progressive Front (SPPE) の一党独裁が宣言され、これは1991年に複数政党制に移行するまで続いた。1992年には国民投票によって新憲法が承認され、その元で行われた1993年の選挙でルネ大統領の SPPF は勝利を収め、同党の政権は継続した。その後ルネ大統領は2度再選されたが、任期中の2004年に退任、当時副大統領であったミシェル氏が規定にしたがって大統領に昇格した。2006年の大統領選挙でミシェル大統領は53.73%の得票率で再選され、現在に至る。SPPF の政策は社会主義をベースにしているが、主たる産業が観光業ということもあって西側諸国との関係は密に維持しようとするものである。
- 30) 今後セイシェルやパプアニューギニアなど同じようにクレオールを公用語とする政体とそうしていない政体との間の相違について多面的に観察する予定である。

### 参考文献

- ARENDS, Jacques, Pieter Muysken, and Norval Smith (eds.). 1994. *Pidgins and Creoles An Introduction*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- BAKER Philip, and Chris Corne. 1982. *Isle de France Creole: affinities and origin*. Ann Arbor: Karoma.
- BAKKER, Peter. 1997. *A Language of Our Own*. New York/Oxford: Oxford University Press.
- BAKKER, Peter, and Pieter MUYSKEN. 1994. *Mixed languages and language*

- intertwining. In Arends et al. (eds.): 41–52.
- BYBEE, Joan L. 1985. *Morphology. A Study of the Relation between Meaning and Form*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- CHAUDENSON, R. 1974. *Le Lexique du parler créole de la Réunion*. Paris: Champion.
- GILBERT, Glenn. 1986. The language bioprogram hypothesis: Déjà vu? In MUYSKEN, Pieter and Norval SMITH (eds.): 15–24.
- HOLM, John. 1988. *Pidgins and Creoles*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 2004. *Languages in Contact*. Cambridge: Cambridge University Press.
- MÜHLHÄUSLER, Peter. 1986. *Pidgin and Creole Linguistics*. Oxford: Blackwell.
- MUYSKEN, Pieter, and Norval Smith (eds.): 1986. Substrata Versus Universals in Creole Genesis. Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins.
- . 1986. Problems in the identification of substratum features in the Creole languages. In MUYSKEN, and SMITH (eds.): 1–13.
- . 1994. The study of pidgin and creole languages. In Arends et al. (eds.): 3–14.
- ROMAINE, Suzanne. 1988. *Pidgin and Creole Languages*. London/New York: Longman.
- TODD, Loreto. 1990. *Pidgins and Creoles 2<sup>nd</sup> edition*. London/New York: Routledge.
- THOMASON, Sarah G. and Terrence KAUFMAN. 1989. *Language Contact, Creolization, and Genetic Linguistics*. Berkeley/Los Angeles/London: University of California Press.
- VINTILĂ-RĂDULESCU, I. 1976. *Le Créole français* The Hague: Mouton.
- 山口 巖. 1995. 『類型学序説——ロシア・ソヴェト言語研究の貢献』京都: 京都大学学術出版会.

なおレユニオン、セイシエルの情報は上記文献他、次の WEB 上の情報を用いた。

<http://www.regionreunion.com/fr/spip/spip.php?page=accueilv2>

<http://www.state.gov/p/af/ci/se/>

<http://lcweb2.loc.gov/frd/cs/sctoc.html>